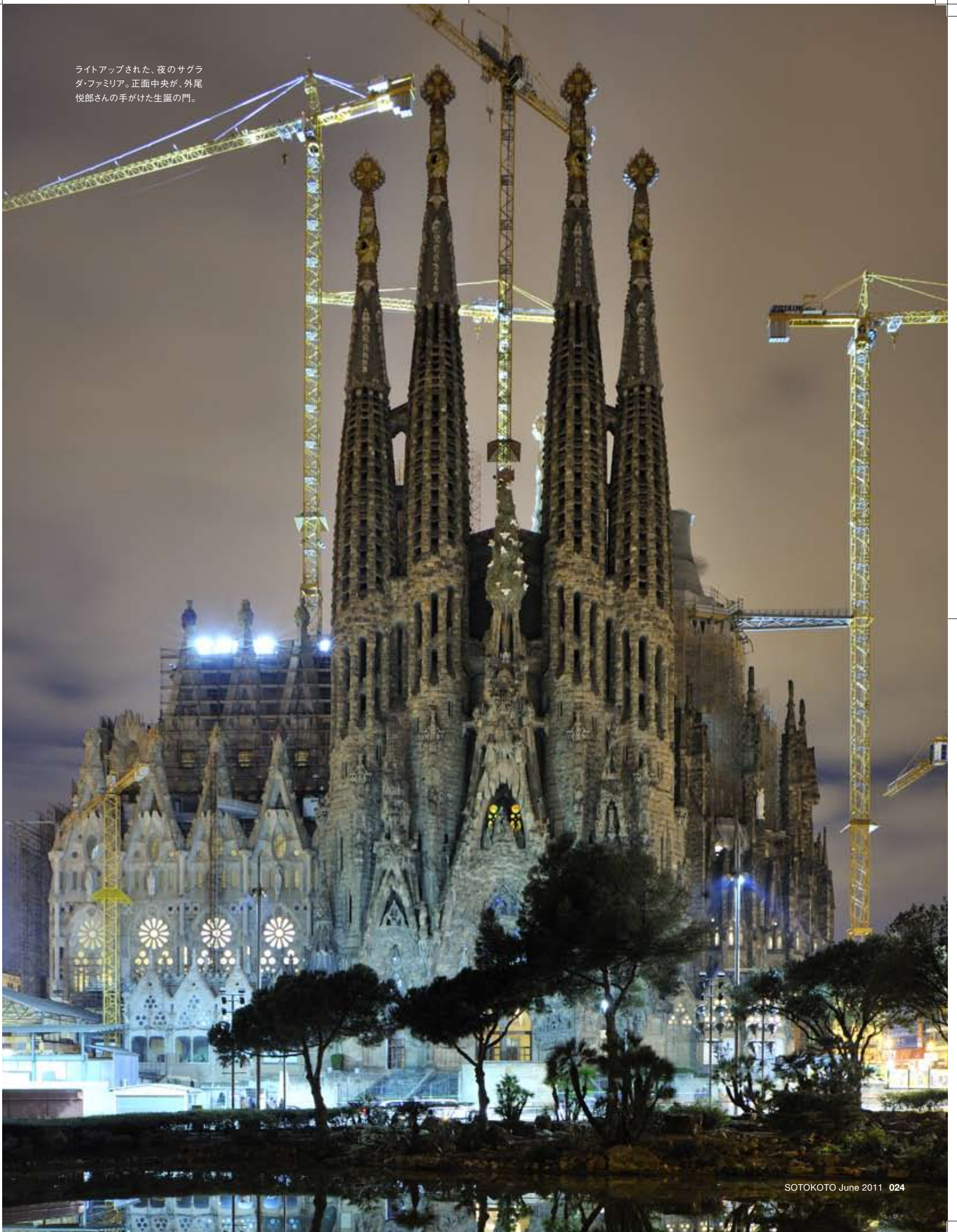


ライトアップされた、夜のサグラ
ダ・ファミリア。正面中央が、外尾
悦郎さんの手がけた生誕の門。



外尾悦郎

サグラダ・ファミリア専任彫刻家

世紀をまたぐ仕事を、受け継ぐ。

アントニオ・ガウディが設計した、

「石の聖書」とも呼ばれる贖罪教会サグラダ・ファミリアは、

1882年の着工から、スペイン・バルセロナでその建築作業が今も続く。

1978年からこの仕事に携わる、

サグラダ・ファミリア専任彫刻家、外尾悦郎さんに話を聞いた。

photographs by Yusuke Abe text by Yumi Kumaki



サグラダ・ファミリア専任彫刻家・外尾悦郎さん。大聖堂内部は、人々の喧騒と敬虔な空気が混在している。

人の森

SOTOKOTO

MTU

volume 12

ガウディが見た視点で、見る。

ソトコト(以下S) アントニオ・ガウディが詳細な設計図を残さなかったサグラダ・ファミリアを、どのように造っているのかを教えてください。

外尾悦郎(以下外尾) おっしゃるとおり、ガウディは設計図をあまり描かない人でした。模型はぜひぶん残っていたけれど、もともと少ない図面とともに、スペイン内戦中に破壊されてしまった。その残骸を集めて復元したり、手に入る限りの資料を集め、それを手がかりに彼が目指していたものを探していくわけです。それをするためには、ガウディそのものを知ることが大切ですが、それ以上に、ガウディがいた場所に立つ

て、彼の視点で、彼が見ていた方向を見なければならぬ。

ガウディが実際に手がけた部分には、本当に多くのヒントがちりばめられています。たとえば、ある場所に据えられたあまり目立たない小さな彫刻が、実はその構造の脆弱さを補強し、さらに象徴としてのメッセージをも発している。サグラダ・ファミリアのなかには、そうした場所がいくつまでもあります。それらの前に立ち、彼はなぜここにこれを作ったのか、なんのために必要だったのか、どんなメッセージをこめたのかを感じ取り、学んでいく。その繰り返しです。

そして、ガウディならこう造る



(上)生誕の門に設置された、イエス生誕を祝福する楽器を奏する15の天使像も外尾さんの作品。スタンドグラスの上には「受胎告知」も見える。(下)あらゆる場所に生き物の彫刻が施されている。

だろうというものに辿り着く。

S ガウディの構想にはなかった、しかし建築物として必要な、「4人の福音書家の塔」に設置された雨樋を、外尾さんがゼロからデザインしたのも、そうした考え方がベイスになっているわけですね。

外尾 そうです。雨樋が必要だからと、単に機能だけを考えて造るわけにはいかないのがサグラダ・ファミリアなのです。そこにはなんらかの象徴、メッセージがなければならぬ。

この教会には、いくつもの雨樋があります。カエルやヤモリ、ウミガメなどが彫刻されているのは、水辺の生物を水に関わる場所に置いたということです。だからといって、福音書家の雨樋も水にまつわる生物で造れば良いというわけにはいかない。

サグラダ・ファミリアは、高い場所には天使や鳥、地上に近い場所には両生類や爬虫類を設置するのが原則です。自然と同じように

なっている。福音書家の塔の雨樋は、聖堂の屋根よりも高い場所、いわば神の領域にあたるのに、地上の動物を彫るのはおかしい。

では、単純に福音書家を彫れば良いかといえば、彼らを雨水にさらすようなことは失礼だし、そもそも塔自体がマタイ、ヨハネ、ルカ、マルコの象徴になっているわけですから、重複になってしま

う。ガウディは、そんな無駄なもの造らないはずですよ。だから、僕は4人それぞれの人生にまつわるエピソードをイメージさせるデザインにしようと思っただけです。**S** 具体的には？

外尾 マタイは、イエスの弟子になる以前は収税士でした。そこから、仕事を辞めた、つまりお金を集めるのを止めたマタイの足下には、穴の空いた集金袋が落ちてくるのではと想像したんです。それで、袋の口が水が集まり、破れた穴から流れ出るデザインを考えました。

S ただ、そこまで考え抜いて出した結論でも、正誤をジャッジしてくれるガウディはもういない。

つまり最後はご自身の決定を信じるしかないわけですが、それを怖くとは思いませんか？

外尾 幸いなことに、長年ガウディを研究している方、サグラダ・ファミリアで50年以上仕事をしてきた人たちが、「これはガウディだね」と言って賛同してくれた。スタッフのなかには、僕が造った模型を見て「これは、ガウディのいつのデザインだ？」と尋ねた人もいます。うれしかったですよ。

もちろん迷うこともたくさんあります。でも、ガウディが遺した「オリジナリテイ」とは、オリジンに戻ることに人間は創造しない。自然のなかから発見するだけだ」という言葉が、大きな指針になってくれます。迷ったときには、オリジン、つまり原点に立ち戻って見直し、考え直してみることがオリジナリテイだと、ガウディは言っているんです。

でも、もしも今以上にすばらしいアイデアが誰かから出されたら、僕はそれに従おうと思っと思っています。少しでもガウディが構想したものに近づけるなら、そのほうがいい。

(上左)マリアを仰ぎ見る少女の背後に、悪魔の顔と金の入った袋が。(上右)爆弾にかかったアナーキストの手が、ためらっている。(下)口ザリオの間。手前のアーチ下右側にアナーキスト、左に少女の像がある。壁面中央がマリア像。



授かった「知恵」を活かす。

S たったひとつのデザインを生み出すのにも、それだけの試行錯誤が必要であるなら、残りたった15年でここを完成させるのは、あまりにも非現実的なスケジュールに思えてきます(執行委員会は、ガウディの没後100年にあたる2026年に完成させると発表している)。

外尾 痛いところを突いてきますね(笑)。確かに、大聖堂のなかだけでも、あと100体近くの彫刻が配されるべきだと僕は考えています。サグラダ・ファミリアは、巨大であることだけが存在意義ではない。その巨大空間に、どんなアイデアやメッセージが込められているかが大切なんです。訪れた人々の感性を刺激し、目覚めさせ、さまざまなことを考えさせてくれる、それがサグラダ・ファミリアの魅力であり、価値であるわけですから。

ガウディは、「これは一体いつ完

成するんだ？」と尋ねられると、「神はお急ぎになりません」と答えていました。だから急ぐ必要はないはずなんです。

今、僕の考えに賛同・協力してくれる人が世界中が増えて、だから僕は呼ばれればどこにでも行って話をしますよ。サグラダ・ファミリアを通じて、感性を共有できる友人が増えるのは、とてもうれしいことです。

S 外に賛同者ができればできるだけ、サグラダ・ファミリアの現状が辛くなりませんか？

外尾 人間がひとりひとり違うのは、神の業です。違うからこそ社会は成り立っている。そのなかで、自分を大事にして、なおかついかに他者を尊重するか。エゴを押し通すだけでは生きてはいけません。人と人が対立したときに、どうやって解決していくかを考える知恵というものを、人間は神から授かっている。その知恵を



訪ねてきた友人と歓談中。周囲には、すぐに人だかりが。

どう使っていくかを、我々は問わ
れていると思います。
この教会も、ひとつの社会で
す。ガウディの時代から、さまざま
な考えの人間が関わり、これか
らも関わっていくでしょう。それ
はいいことです。同じ人間が同じ
ものを造っているだけでは、おも
しろくない。しかし、それぞれの
個性を活かしながらも、みなぎひ
とつの方向、ガウディが見ていた
方向に向かわなければ、おかしな
ことになってしまう。

ガウディはもういないんだか
ら、なにを造ってもいい、好きな
ようにやってもかまわないんだ。
そんなことをしていたら、この教
会は、いつか声にならない悲鳴を
上げるでしょう。それを阻止する
ためには、どうしたらいいか。そ
うしたことを日々学んでいくこと
もまた、この教会を造っていくこ
との意味であると、僕は考えてい
ます。とても難しいことではあり
ますが。

S 外尾さんが復元した「ロザリ
オの間」を見るたびに、ガウディ

は現代社会が抱えている問題を見
抜いていたように感じます。
外尾 今まさに爆弾を投げつけよ
うとしている貧しいアナキスト
の青年の指が、実は小指しか爆弾
にかかっている。迷っているの
です。しあわせな社会をつくるた
めには爆弾テロを起こすしかな
い。しかし忍び寄った悪魔が渡し
た爆弾を受け取る手が一瞬止まっ

たのは、罪もない人々の生命を奪
うことのために覚えたから
で、そこには大きな葛藤、苦悩が
生じている。
一方の少女も、悪魔が差し出し
たお金を前に、やはり迷ってい
る。身体を売ってでもお金が欲し
い。それは自分のためではなく、
病気の家族のためかもしれない。
どうしても必要なお金だけれど、

根源的な問いとその答え。

S 外尾さんは、ご自身を石工だ
といわれます。アーティストと名
乗らないのはなぜですか？

外尾 僕は、石を彫る職人です。
アーティストという言葉は、最近
の人間が勝手に作りだした言葉
で、職人とアーティストの差なん
てない。人を永遠に感動させるも
の、時代を超えて愛され続けるも
のを、たまたま造りだせたそのと
きだけ、人はアーティスト、芸術
家になれるのだと思います。

S ガウディは、職人をとて大
切にしていたと聞きました。
外尾 ガウディは、職人たちの気
質を知っていました。模型を見せ
て、「こんなものを造れないかな」
と提案すると、職人たちはなんと
かしようとやる気を出す。彼らの
アイデアを、ガウディはきちんと
耳を傾けて取り入れていった。そ
うなると、より意欲的になるのが
人間です。仕事に対して、細心の
注意も払うでしょう。

着工から130年近い時間のな

身を汚す恐ろしさに震えている。
ロザリオの間には、「誘惑 (Tenta
cion)」という象徴的な副題が付
いています。このふたりは迷いの
なかで、マリア像を仰ぎ見てい
る。助けを求めている。でも、彼
らが誘惑に克ったか負けたか、答
えはこの部屋にはない。ガウディ
は、見る者に問うているのだと思
います。権力や暴力、お金の誘惑

に、あなたはどうか立ち向かいます
かと。
こうした誘惑は、今にはじまっ
たことではなく、何千年、何万年
も前から連綿と続いているテーマ
です。ただ確かに、現在の社会で
は特に、それはサグラダ・ファミ
リアも含めてですが、すべての人
間が自らに問い、答えを見つけて
いかねばならないことでしょう。



(上) 大聖堂地下にあるガウディの墓所に手を置
き、祈りを捧げる外尾さん。(下) ガウディのデス
マスク。奥はマタイの雨樋の模型。



外尾悦郎
そと・えつろう●1953年福岡県生まれ。京都
市立芸術大学彫刻科卒業。旅行中、偶然立ち
寄ったサグラダ・ファミリアに衝撃を受け、78年
より同教会の彫刻を担当。現在は専任彫刻家。
2002年、手がけた15体の天使像を設置したこと
により、「生誕の門」が完成。05年、世界遺
産に登録された。著書に『ガウディの伝言』(光
文社新書)などがある。

S 最後に改めて、
ガウディとサグラダ・
ファミリアの魅力。
外尾 ガウディが見ていた方向を
見つめていると、本当にさまざま
なことが見えてきます。それは建
築や彫刻に関してだけではなく、ま
せん。人はどう生きていくべき
か、なにが本当に大切なものなの
か、人間とはなんなのかといっ
た、根源的な問いに対する答えが
ある。僕もそれをすべてつかんだ

わけではなく、ガウディからヒン
トをもらいながら今も探し続けて
います。
そういうガウディからのメッセ
ージが詰まったサグラダ・ファミ
リアは、訪れた人に必ずなにかを
気づかせてくれるはず。それ
は人間のすばらしさかもしれない
し、自分が迷っていることへの答

えかもしれない。探せば見つかる
ものがたくさんあるのが、この教
会の魅力なんです。
ガウディが、サグラダ・ファミ
リアで最後に遺した言葉を、ぜひ
読者のみなさんにお伝えしたいと
思います。
「明日は、もっとよいものを造
ろう」